

# 環境影響評価における因果的判断～ダム排砂を例として

本間真佐人（北海道大学）

本発表では、環境影響評価学の中でも、発表者が専門とする水環境分野に関わる事例を題材として取り上げる。

米国環境保護庁（Environmental Protection Agency）のウェブサイトでは、水系において科学者や技術者が正当な因果的評価を行うための情報提供を目的とした、CADDIS (Causal Analysis/Diagnosis Decision Information System) というオンラインアプリケーションが公開されている。CADDIS は、主に河川生態系における、ストレス同定のための論理的かつ段階的な枠組みを紹介しているサイトである。注目すべきなのは、その環境評価の方法論を有益かつ正当なものに仕上げるための強い概念的基盤を得るために、科学哲学的因果論における諸概念とその歴史をコンパクトに紹介し、CADDIS の因果的アプローチとの関わりや、それぞれの概念に対する CADDIS の立場について解説している点である。

日本国内では、まだこのような科学哲学の応用例を見ることはほとんどない。一方で、適切な環境管理を実行するために、不確実な条件の下でも一定の結論を出すことが求められる環境影響評価学は、科学哲学的な概念整理が潜在的に必要とされている分野であるように思われる。その一例として、ダムと下流海域における漁業被害の因果関係の是非を巡って、科学者間に見解の相違が見られる事例を紹介したい。本発表では、科学哲学的因果論の科学的実践への応用の先駆例である CADDIS が紹介している科学的方法論を参考にしつつ、当該事例におけるいくつかの問題の所在を科学哲学的視点から考察していき、課題の整理を行う。このような作業を通じて、環境影響評価における科学哲学の役割について考えるための情報提供を行いたい。